

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

Japanese Writers and George Eliot: A Bibliography (Sequel)

大 嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

This is a bibliography of noted literary persons and thinkers in Japan whose writings and translations contain references to George Eliot. The entries are divided according to Japanese writers and are presented in chronological order.

This is not a complete bibliography of Japanese writers and George Eliot. I apologize for any inadvertent omissions and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌，日本の作家，ジョージ・エリオット
Key words：bibliography, Japanese writers, George Eliot

I はじめに

本書誌は、前号に掲載した「日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）」の続きである。

本書誌の各項目は作家ごと（生年順）に区分し、年代順に整理している。ただし、連載のものに関しては、初出を基準として一括して整理し、その細目は破線（……）で区切って明示している。また、数版を重ねている書籍の場合、初版本及び改訂等で内容に変化が認められるものを中心に調査した。同様に、幾つかの出版社から複数出版されている書籍や繰り返し出版されている著名な作

家の全集もの場合、できるだけ古い出版年と最新の出版年のものを中心に調査した。¹

原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いているが、一部新字体を採用したところもある。また、かなの表記に関しては原則として今日の通用形を用いている。

本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたっては、文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学附属図書館の学術情報チームには特にお世話になった。ここに記して感謝する。

II 日本の作家等とジョージ・エリオット（続）

発行年月日	著者名・訳者名等	作品名・論文名等	書名・雑誌名等	発行所、頁等	備 考	
内田魯庵（1868-1929）						
1889.06.01	明治 22	ふ、ち、（内田魯庵）	戯 號	女學雑誌	第百六拾四號， pp. 15-16.（雑録）	エリオットへの言及はp. 16.
1896.01.03	明治 29	魯庵生	『閨秀小説』を評す（其一）	毎日新聞	第七千五百十七號， p. 2.	「是等の女秀才は本より他日の紫式部或はエリオットたらん事を期する大抱負ある人ならば……」
1896.01.05			『閨秀小説』を評す（其二）		第七千五百十八號， p. 1.	
1896.01.07			『閨秀小説』を評す（其三）		第七千五百十九號， p. 1.	
1896.01.08			『閨秀小説』を評す（其四）		第七千五百二十號， p. 1.	
1912.12.18	大正 元年	溪々子	女流作家エリオットに就て	學 鏡	第十六年第十二號， pp. 13-18.	かなり詳しい紹介記事；「溪々子」とは内田魯庵の筆名（『近代文学研究叢書 第三十一巻』訂正版〔昭和女子大学，1970. 03.30〕p. 48）
1926.02.20	大正 15年	エヌ、ケー、ド リンクウオーター （内田魯庵）	英國現代小説家は何かを愛讀するか	GAKUTO（『學鏡』）	30th YEAR NO. 2, pp. 1-2.	ペンバートン（Max Pemberton）は「エリオットの "Romola"」を推奨し（p. 1），ジェローム（Jerome K. Jerome）は愛読する小説家としてエリオットをあげている（p. 2）
徳富蘆花（1868-1927）						
1896.06.25	明治 29	敬享生	米國女文學者の旗頭（スタウ老夫人）	家庭雑誌	第八拾号號， pp. 3-17.（史談）	敬享生とは徳富蘆花のこと；エリオットへの言及はp. 16.

* 兵庫教育大学（社会・言語教育学系）

馬場弧蝶 (1869-1940)						
927.08.20	昭和2	馬場勝彌 (馬場弧蝶)	「サイラス マーナー — エリオット —」	世界名著解題	誠文堂, pp. 292-303.	
1928.03.	昭和3	馬場弧蝶 訳		サイラスマーナ, レエヴロウの織工	国民文庫刊行会, 321 pp., A5	未確認
金子築水 (本名 金子馬治, 1870-1937)						
1893.07.10	明治26	金子馬治	詩才論 (詩才本論, 第一 小き詩才, 第二 おしなべて謂ふ詩的想像)	早稲田文學	第四拾參號, pp. 2-23.	『文藝及哲學論集』(1938.05.25) に収録
1893.07.25			詩才論 (第三 天才論, (第一) 客観より觀たる天才, (第二) 主観より觀たる天才, (一) 無意識靈機)		第四拾四號, pp. 6-30.	
1893.08.10			詩才論 (天才論 — (二) 無意識靈機の理由)		第四拾五參號, pp. 1-20.	
1893.08.25			詩才論 (第四 詩才並びに狂氣, 遺傳, 及び教育)		第四拾六號, pp. 1-20 ; エリオットへの言及はp. 3.	「その他ミルトン, ……ブロンテ, デスケンズ, エリオット, デクシー, サツカレー, ……ギョオテ等もまた時としては多少狂氣めきたる舉動ありきといふ」 (p. 3)
1894.03.11	明治27	みすゞのや (水簾舎主人)	歸納的批評論	早稲田文學	第五十九號, pp. 545-64.	モールトンの「批評の法」(p. 546)の紹介; エリオットへの言及はp. 556:「彼等はいふ, ジョルジ, エリオットは人物を組成すれども, シャーロット, ブロンテは人物を創作ると……」;「みすゞのや」とは「金子築水 (本名 金子馬治)」のこと (柳田泉, 『西洋文学の移入』[春秋社, 1974.07.10], p. 273; 金子馬治, 『文藝及哲學論集』[理想社出版部, 1938.05.25], pp. 69-84を見よ); 『近代文学研究叢書 第二十卷』(昭和女子大学近代文化研究所, 1963.11.15), p. 135によれば, 著者は森嶋外とされているが誤りであろう; 本書誌IV, 2-2を参照
1938.05.25	昭和13	金子馬治	「詩才論」, 「歸納的批評論」	文藝及哲學論集	理想社出版部, pp. 1-68, 69-84 ; エリオットへの言及はpp. 54, 77-78.	
戸川秋骨 (1870-1939)						
1893.03.31	明治26	榎月	英国騒壇の女傑 ジョージ イリオット	文学界	第三號, pp. 1-9. (各号通しの頁番号というものはなく, 各題目ごとに頁が付けられている)	表紙には「女文傑イリヲット 榎月」, 目次には「ジョージ, イリオット 榎月」; 本文の記載による; 榎月とは戸川秋骨のこと (柳田泉, 『西洋文学の移入』[春秋社, 1974.07.10], p. 261); かなり詳しい紹介記事; 「仏のシェーレルのエリオット論によつたもの」(笹淵友一, 『文学界』とその時代 下』[1960.01.25], p. 507)
1898.04.10	明治31	戸川明三 (戸川秋骨)	英國詩壇の藝術的趣味	帝國文學	第四卷第四十, pp. 13-28. (論説)	エリオットへの言及はp. 17.
1908.11.18	明治41	戸川秋骨	エリオット	英文学講話	東亞堂書房, pp. 136-38.	「ブロンテ」(pp. 135-36)の項の末尾 (p. 136) においてもエリオットへの言及あり
1915.05.12	大正4	戸川秋骨	「英文學史の選択」, 「政治家の文學」の中の「II. John Morley」, 「イギリスの雑誌」, 「イギリス小説二十五種」	英文學精講	東亞同書房, pp. 1-6, 113-20, 293-99, 299-300.	エリオットへの言及はpp. 3, 117, 294, 296, 300.
1926.07.15	大正15	戸川秋骨	英文學印象記を読んで: 平田禿木君に無駄話を送る	英文學覺帳	大岡山書店, pp. 257-71.	エリオットへの言及はp. 263.
1933.06.05	昭和8	戸川秋骨		傳記文學	岩波書店, 岩波講座 世界文學, p. 31.	
山田美妙 (1868-1910)						
1889.09.15	明治22	(山田美妙)	最上小説十種	以良都女	第四卷第二十七號, pp. 35-36. (雜纂)	「あたらんた」雑誌で「此頃讀者にその好む小説十種の指名を求め, やがて集まつた上でその中の多数を數へて掲げ」たものの中に『アダム・ビード』が挙げられている (p. 35); 筆者については, 武田勝彦「明治文壇とブロンテ姉妹 3: 雑誌を追って」, 『ブロンテ全集月報 3』(みすゞ書房, 1995.06)を参照

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

島崎藤村（1872-1943）						
1891.10.03	明治24		ゼオヂ, エリオット	女學雑誌	第二百八十五號, p. 9. (雑録)	『アダム・ビード』への言及；島崎藤村の筆になるものではないかという疑いが存するもの（『藤村全集第十六巻』[筑摩書房, 1967.11.30]の「解題」[pp. 593-94]を見よ）
1892.02.20	明治25	島の春（島崎藤村）	詩人ミルトンの妻	女學雑誌	第三百五號, pp. 10-13. (史傳)	目次・表紙は「ミルトンの夫人」となっている；記載は本文中のものによる；『ミドルマーチ』に言及（p. 11）
1892.03.20	明治25	無名氏譯	小説の實際派を論ず	女學雑誌	第三百八號, pp. 4-9. (論説)	無名氏とは藤村のこと（『明治文学全集32 女學雑誌・文学界集』の解説p. 400）；『アダム・ビード』に言及（p. 6）
1892.06.18	明治25	無名氏譯	ジョージ, エリオット小説中の女主人公	女學雑誌	第三百二十一號, pp. 7-9. (論説)	目次には「ジョージ, エリオットが小説中の女主人公（無名氏）」とある；記載は本文中のものによる；「ドロシア」を「凡そ世の小説のうちに最もけだかく最もうつくしき女子ありとせむか」（p. 9）
1967.11.30	昭和42	島崎藤村	詩人ミルトンの妻	藤村全集第十六巻	筑摩書房, pp. 15-20.	初出は『女學雑誌』第三百五號（1892.02.20）；『ミドルマーチ』に言及（pp. 16-17）
1967.11.30	昭和42	島崎藤村	小説の實際派を論ず	藤村全集第十六巻	筑摩書房, pp. 20-26.	初出は『女學雑誌』第三百八號（1892.03.20）；『アダム・ビード』に言及（pp. 22-23）
1967.11.30	昭和42	島崎藤村	ジョージ, エリオット小説中の女主人公	藤村全集第十六巻	筑摩書房, pp. 54-56.	初出は『女學雑誌』第三百二十一號（1892.06.18）
田山花袋（1872-1930）						
1917.06.15	大正6	田山花袋	私達のグループ	東京の三十年	博文館, pp. 164-67；エリオットへの言及はp. 167.	『『文学界』の人達は、私の嫌ひな英文學の方ではあつたけれど、それでも私達などよりも外國の文學に明るいのは私を見た。平田君は高師の學生、戸川君は大學の選科、いづれも英語に長けてゐて、平田は湯島の下宿で、ジョージ・エリオットの『サイラス・マアナ』などを讀んでゐた。』（pp. 166-67）
1923.07.24	大正12	田山録彌	私達のグループ	花袋全集第十一巻	花袋全集刊行會, pp. 541-44；エリオットへの言及はp. 543.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
1947.05.25	昭和22	田山花袋	私達のグループ	東京の三十年	創元社, pp. 107-09；エリオットへの言及はp. 109.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
1952.11.25	昭和27	田山花袋	私達のグループ	東京の三十年	河出書房, 市民文庫136, pp. 94-96；エリオットへの言及はp. 96.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
1974.03.20	昭和49	田山花袋	「東京の三十年」の中の「私達のグループ」	田山花袋全集 第十五巻	文泉堂, pp. 541-44；エリオットへの言及はp. 543.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
1981.05.18	昭和56	田山花袋	私たち ^{[?]?} のグループ	東京の三十年	岩波書店, 岩波文庫, pp. 100-02；エリオットへの言及はp. 102.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
1998.09.10	平成10	田山花袋	私達のグループ	東京の三十年	講談社, 講談社文芸文庫, pp. 111-13；エリオットへの言及はp. 113.	初出は『東京の三十年』（博文館, 1917.06.15）
岩野泡鳴（1873-1920）						
1898.08.10	明治31	泡鳴子（岩野泡鳴）	「といふ」録	女學雑誌	469号, pp. 24-26. (雑録)	『アダム・ビード』, リッギン, スペンサー, リウスに言及（p. 25）
平田秃木（1873-1943）						
1919.11.15	大正8	風潭生	ジョージ・エリオット（一〜四）	英語青年	第四十二巻第四號, 研究社, p. 107. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	風潭生とは平田秃木のこと
1919.12.01			ジョージ・エリオット（五, 六）		第四十二巻第五號, 研究社, p. 139. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1919.12.15			ジョージ・エリオット（七〜九）		第四十二巻第六號, 研究社, p. 171. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	
1924.01.15	大正13	平田秃木	ジョージ・エリオット	『英文學印象記』	アルス, pp. 146-57.	末尾に（1919, 12）の記載；「英小説發達の徑路」（pp. 158-70; 末尾に〔1916, 6〕の記載）のp. 170においてもエリオットへの言及あり；記載は6版（1924.02.05）に基づく；『英文學點描』（1936.09.22）を見よ

1930.02.05	昭和5	平田禿木	「近代寫實小説」の中の「キングズレ、エリオット女史の時代」	佐藤義亮編輯『英吉利文學篇(上)』	新潮社, 世界文学講座第三卷, pp. 289-98; エリオットへの言及はpp. 294-95.	
1933.04.10	昭和8	平田禿木	女流作家について	英文学散策	第一書房, pp. 163-67.	初出は「新英米文学」(1932.08. 01); 新装版(1941.01. 11); 『平田禿木選集第二卷 英文学エッセイ』(南雲堂, 1981.06.30)に収録(pp. 311-13)
1936.09.22	昭和11	平田禿木	ジョージ・エリオット	英文學點描	信正社, pp. 167-78.	『英文學印象記』(1924.01.15)の改題で、それに百頁に近き新篇を加へたもの(「巻頭に」p. 1); 末尾に「— 1919.12 —」の日付
1941.01.11	昭和16	平田禿木	女流作家について	『英文学散策』新装版	第一書房, pp. 163-67.	初版は1933.04.10の刊行
1948.11.25	昭和23	平田禿木	「第三部 十八世紀の英文学」における「第三期 ジョンソン博士の時代」の中の「第四章 小説の發達」	英文學史講話 上	全國書房, pp. 229-39; エリオットへの言及はp. 239.	のちに『平田禿木選集 第一卷 英文学史講話』(南雲堂, 1981. 03.30)に収録, ただし現代仮名遣い等の変更が加えられている
1949.06.25	昭和24	平田禿木	「第四部 十九世紀の英文学」における「第五項 十九世紀の小説」の中の「第六章 ジョージ・エリオットの時代 附 エリオットに就て」	『英文學史講話 下巻』	南雲堂, pp. 99-113; 他にpp. 68, 71, 137においてもエリオットに言及	のちに『平田禿木選集 第一卷 英文学史講話』(南雲堂, 1981. 03.30)に収録, ただし現代仮名遣い等の変更が加えられている
1981.03.30	昭和56	平田禿木	「第五部 十九世紀の英文学 第四項 十九世紀の小説」の中の「第六章 ジョージ・エリオットの時代 — 附 エリオットについて」	平田禿木選集 第一卷 英文学史講話	南雲堂, pp. 358-69; 他にpp. 102, 325, 327, 411, 476, 481においてもエリオットに言及	初出は佐藤義亮編輯『英吉利文學篇(上)』(『世界文学講座 第三卷』; 新潮社, 1930. 02.05)及び「英語青年」1919. 11.15-1919. 12.15; 「附 エリオットについて」は『英文學點描』中の「ジョージ・エリオット」と同一内容のもの, ただし, 表記は現代仮名遣い等に改められている
1981.03.30	昭和56	平田禿木	女流作家について	平田禿木選集 第二卷 英文学エッセイ	南雲堂, pp. 311-13; エリオットへの言及はpp. 312-13.	初出は「新英米文学」(1932.08. 01); 『英文学散策』(1933.04.)所収
上田敏(1874-1916)						
1897.09.10	明治30	上田敏	六十年前の英文壇	帝國文學	第三卷第九, pp. 91-92. (『雑録』中の「海外騒壇」の項)	エリオットへの言及はp. 91; 訂正等を加えて『最近海外文學』(交友館, 1901.12.03)に収録
1899.05.10	明治32	上田敏	佛文近著	帝國文學	第五卷第四, pp. 125-26. (『雑録』中の「海外騒壇」の項)	エリオットへの言及はp. 126; 訂正等を加えて『最近海外文學 續篇』(交友館, 1902.03. 08)に収録
1900.03.10	明治33	上田敏	ラスキン逝く	帝國文學	第六卷第三, pp. 100-02 (『雑録』中の「海外騒壇」の項), エリオットへの言及はp. 100.	『定本 上田敏全集 第三卷』(教育出版センター, 1978.11.25) 655-56に収録
1900.06.15	明治33	上田敏	「十九世紀」の「第五部 文藝史」の中の「第一章 十九世紀の英文学」における「八 小説家」	『太陽』臨時増刊『十九世紀』	第六卷第八號, 博文館, p. 181.	『上田敏全集 第五卷』(改造社, 1928.10. 15)に収録; 『定本 上田敏全集 第八卷』(教育出版センター, 1981.04.25)に収録
1900.07.10	明治33	上田敏	英國小説史	帝國文學	第六卷第七, pp. 85-87. (『雑録』中の「海外騒壇」の項)	井ルバア, クロックス「英國小説の發達」(マクミラン社)の紹介文; エリオットへの言及はpp. 86, 87 (Adam Bedeに言及); 訂正等を加えて『最近海外文學 續篇』(交友館, 1902.03.08)に収録
1901.12.03	明治34	上田敏	六十年前の英文壇	最近海外文學	文友館, pp. 137-38.	『帝國文學』掲載分に訂正等を加え, 収録したもの; 『上田敏全集 第三卷』(改造社, 1928.06.25)に収録; 『定本 上田敏全集 第三卷』(教育出版センター, 1978.11.25) 451-52に収録(p. 646にはその編注)
1902.01.	明治35		十九世紀に於ける歐米の大著述	學鐙	第五十六號, pp. 11-102.	目次の表記は「十九世紀に於ける歐米の大著述に就ての諸家の答案 (ABC順)」; (1) English Literature において上田敏が「George Eliot: Silas Marner」(p. 89)を挙げている。
1902.03.08	明治35	上田敏	佛文近著	最近海外文學 續篇	文友館, pp. 36-37.	『帝國文學』掲載分に訂正等を加え, 収録したもの; 『上田敏全集 第三卷』(改造社, 1928.06.25)に収録; 『定本 上田敏全集 第三卷』(教育出版センター, 1978.11.25) 505-06 (p. 652にはその編注)に収録

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

1902.03.08	明治 35	上田敏	英國小説史	最近海外文學 續篇	文友館, pp. 69-72.	『帝國文學』掲載分に訂正等を加え、収録したもの；『上田敏全集 第三卷』（改造社, 1928.06.25）に収録；『定本 上田敏全集 第三卷』（教育出版センター, 1978.11.25）527-28に収録
1907.11.01	明治 40	上田敏	自然主義	新小説	第十二年第十一巻, 春陽堂, p. 29.	『上田敏全集 第五巻』（改造社, 1928.10.15）に収録；『定本 上田敏全集 第七巻』（教育出版センター, 1980.09.10）に収録；『近代文学評論大系 第3巻 明治期III』（角川書店, 1972.02.29）に収録
1914.01.01	大正 3	上田敏	文藝の最新傾向 一, 二	大阪朝日新聞	第一萬千四百五十九號, p. 29.	『上田敏全集 第五巻』（改造社, 1928.10.15）に収録；『定本 上田敏全集 第七巻』（教育出版センター, 1980.09.10）に収録
1914.01.02			文藝の最新傾向 三, 四, 五		第一萬千四百六十號, p. 6.	「併し交通は相互であつて、英國よりラスキン, ディッケンズ, ジョージ・エリオット等, ……」
1914.01.03			文藝の最新傾向 六, 七, 八		第一萬千四百六十一號, p. 8.	
1914.01.04			文藝の最新傾向 九, 十, 十一		第一萬千四百六十二號, p. 8.	
1972.02.29	昭和 47	上田敏	自然主義	吉田精一, 和田謹吾編『近代文学評論大系 第3巻 明治期III』	角川書店, pp. 68-71；エリオットへの言及はp. 70.	
大塚楠緒子 (1875-1910)						
1908.5.29	明治 41	大塚楠緒子	「空薫」（第三十三回）	東京朝日新聞	第七千八百十八號, p. 7.	『東京朝日新聞』に明治四十一年四月二十七日から五月三十一日まで三十五回にわたり毎日連載された小説（『明治女流文學集』[筑摩書房, 1966.08.10]の「解題」, p. 426）；ヒロインが窺く本に、「エリオット」がある；『明治女流文學集』（1966.08.10）に再録
1966.08.10	昭和 41	大塚楠緒子	「空薫」（第三十三回）	明治文學全集 81：明治女流文學集（一）	筑摩書房, pp. 324-26；エリオットへの言及はp. 324.	初出は『東京朝日新聞』第7818号（1908.5.29）
長谷川天溪 (1876-1940)						
1898.04.10	明治 31	長谷川天溪	Dickens	文藝俱樂部	第四第五編, pp. 154-67. (東西文豪)	エリオットへの言及はp. 154: 「最近英國小説界を眺むれば、先づ第一に大小説家として指を屈すべきはエリオット女史なるべし」
1906.05.06	明治 39	長谷川誠也		文學訓	博文館, 340 pp.	『文學訓』はGeorge Henry Lewesの "Some Principles of Success in Literature" の抄譯；ルイスに関する解説の部分 (pp. 291-95) の中でエリオットに言及
尾上柴舟 (1876-1957)						
1901.11.20	明治 34	尾上柴舟	附録 ハイネリッヒ, ハイネ評傳	ハイネノ詩	新聲社, pp. 1-30；「附録 ハイネリッヒ, ハイネ評傳」のエピグラフとしてエリオットのエッセイ "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節を引用: 「ハイネは、彼れの時代に於ける、尤も卓絶せる一人なり。遂に、一の反響を喚起することなくして、罷めりと雖も、彼れの聲は、眞の聲なり」 (p. 1；エピグラフの引用文の訳は少し不正確なものとなっている)	国会図書館所蔵本の奥付では、発行月日は「十一月十五日發行」が「十一月二十日發行」に訂正されている。ここではその訂正に従った。
1905.02.20	明治 38			ハイネノ詩 (増補版)	渡邊書店, pp. 1-30；「附録 ハイネリッヒ, ハイネ評傳」のエピグラフとしてエリオットのエッセイ "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節を引用 (p. 1)	「附録 ハイネリッヒ, ハイネ評傳」は初版 (1901.11.20) と同一内容

大 嶋 浩

1967.10.10	昭和 42	尾上柴舟	附録 ハイネリッヒ、 ハイネ評傳	明治文學全集63 佐佐 木信綱 金子薫園 尾上柴舟 太田水穂 窪田空穂 若山牧水 集	筑摩書房, pp. 128-34; 「附録 ハイネリッヒ、 ハイネ評傳」のエビグ ラフとしてエリオット のエッセイ "German Wit: Heinrich Heine" (1856) の一節を引用	譯詩集『ハイネノ詩』(1901.11.20) と同一 内容
窪田空穂 (1877-1967)						
1908.08.15	明治 41	窪田空穂 (柏樹 下人)	昔の早稲田	文章世界	第三卷第十一號, pp. 106-13. 113.	エリオットへの言及はp. 113:「やがて試験 の期となった。……ス井ントンの英文學は 應用で, エリオットの評論の中, 最も難解 な一節であった。」; 著者名は「柏樹下人」 と記されている; 『窪田空穂全集 第五卷 小説・隨筆』(角川書店, 昭和41年5月15 日発行), pp. 212-19, 及び『明治文學全集 63: 佐々木信綱 兼子薫園 尾上柴舟 太 田水穂 窪田空穂 若山牧水 集』(筑摩 書房, 昭和42年10月10日), pp. 279-84に収 録
1966.05.15	昭和 41	窪田空穂 (柏樹 下人)	昔の早稲田	窪田空穂全集 第五 卷 小説・隨筆	角川書店, pp. 212-19; エリオットへの言及は p. 218.	初出は『文章世界』第三卷第十一號 (1908. 08.15)
1967.10.10	昭和 42	窪田空穂 (柏樹 下人)	昔の早稲田	明治文學全集 63: 佐々 木信綱 兼子薫園 尾上柴舟 太田水穂 窪田空穂 若山牧水 集	筑摩書房, pp. 279-84; エリオットへの言及はp. 284.	初出は『文章世界』第三卷第十一號 (1908. 08.15)
薄田泣菫 (1877-1945)						
1916.09.10	大正 5	(薄田泣菫)	髭の有無	『大阪毎日新聞』(夕 刊), コラム隨筆「茶 話」	第一万一千九百七號 (9 月10日付, ただし9月9 日印刷発行)	「紫式部, 清少納言, チョオザ・エリオッ ト, クリステナ・ロセツチ……成程ほん とやわ, みんな髭があらへん。」; 『茶話 下巻』(大阪毎日新聞社・東京日日新聞, 1924.10.18) に収録
1924.10.18	大正 13	薄田淳介	髭の有無	茶話 下巻	大阪毎日新聞社・東京 日日新聞, pp. 435-36; エリオットへの言及はp. 436; 記載は4版 (1924. 10.30) による	表紙には「大阪毎日新聞社發行」の記載; 奥付では, 発行所として「東京日々新聞」 も記載されている
1933.08.30	昭和 8	薄田泣菫	髭の有無	茶話全集 下	創元社, pp. 279-81; エ リオットへの言及はp. 280.	背表紙及びp. 502には「茶話全集 下巻」 の表記, 内表紙は「茶話全集 下」の表記
1939.02.10	昭和 14	薄田泣菫	髭の有無	薄田泣菫全集 第四 卷 隨筆茶話 下	創元社, pp. 252-53; エ リオットへの言及はp. 252.	
1983.11.25	昭和 58	薄田泣菫	髭の有無	谷沢永一, 浦西和彦 編, 『完本 茶話 上』	富山房, 富山房百科文 庫39, pp. 152-53; エリ オットへの言及はp. 152.	
1984.09.01	昭和 59	山崎正和, 丸谷 才一, 木村尚三 郎	「鼎談書評 英国で 「資本論」が書かれ たわけ」の中の「薄 田泣菫『完本 茶話』	文藝春秋	九月特別号, pp. 270-74; p. 272において, 泣菫の コラム「髭の有無」に おけるエリオットへの 言及が引用されている	
千葉龜雄 (1878-1935)						
1924.03.01	大正 13	(阿部次郎, 芥 川龍之介, 大村 嘉代子, 與謝野 晶子, 徳田秋聲, 千葉龜雄)	家庭に於ける文藝書 の選擇に就いて	女性改造	三月號 (第3卷第3号), pp. 10-26; 千葉の発言 のなかでエリオットに言 及 (p. 40)	千葉の発言の中でエリオットに言及:「婦 人の讀物としてはグンテの「神曲」など もよいですが, エリオットやディッケン スあたりの小説も推奨したいですね。」(p. 26)
1997.02.10	平成 9	(阿部次郎, 芥 川龍之介, 大村 嘉代子, 与謝野 晶子, 徳田秋声, 千葉龜雄)	家庭に於ける文芸書 の選擇に就いて	芥川龍之介全集 第 一六卷	岩波書店, pp. 129-41; 千葉の発言の中でエリ オットに言及 (p. 40)	初出は「女性改造」(1924.03.01)
寺田寅彦 (1878-1935)						
1932.12.20	昭和 7	吉村冬彦 (寺田 寅彦)	夏目漱石先生の追憶	俳句講座 第八卷 現代結社篇	改造社, pp. 321-32; エ リオットへの言及はp. 323.	熊本第五高等学校では「オピウムイーター や, サイラス・マーナーを教はつた」(p. 323)
1940.12.20	昭和 8	吉村冬彦 (寺田 寅彦)	夏目漱石先生の追憶	蒸發皿	岩波書店, pp. 343-61; エリオットへの言及はp. 347.	初出は『俳句講座 第八卷 現代結社篇』 (改造社, 1932.12.20); 表紙の著者名は 「吉村冬彦」, 奥付での著者名は「寺田寅彦」

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

1996.02.06	平成 8	寺田寅彦	夏目漱石先生の追憶	漱石全集 別巻 漱石言行録	岩波書店, pp. 66-78; エリオットへの言及はp. 69.	初出は『俳句講座 第八巻 現代結社篇』（改造社, 1932.12.20）, 初出での署名は「吉村冬彦」
永井荷風（1879-1959）						
1909.10.01	明治 42	永井荷風	我が思想の變遷	新潮	第拾壹卷第四號, pp. 67-69.	「で最初には先づ多少英語の智識があつたから、ジョージ・エリオット ^[17] とホーソンを読んで見たが、水沫集などで窺つた大陸文學の様な趣味が無いのと、又一つには語學の力も十分でなかつたので期待した程の面白味は感ずる事が出来なかつた。」(p. 67); 『雑艸園』(1949.05.25), 『明治文学全集73: 永井荷風』(1969.12.25)を見よ
1949.05.25	昭和 24	永井荷風	我が思想の變遷	雑艸園	中央公論社, pp. 83-90; エリオットへの言及はp. 85.	初出は『新潮』第11巻4号(1909.10.01), pp. 67-69.
1969.12.25	昭和 44	永井荷風	我が思想の變遷	明治文学全集73: 永井荷風	筑摩書房, pp. 311-2; エリオットへの言及はp. 312	初出は『新潮』第11巻4号(1909.10.01), pp. 67-69.
厨川白村（1880-1923）						
1923.05.15	大正 12	厨川白村	譯本『サイラス・マアナ』の序	英語青年	第四十九卷第四號, 研究社, p. 120. (巻の通しページ; 号のページ付けはなし)	今泉浦治朗(譯注), 『サイラス・マアナ』(1923.05.0)の「序」と同一内容
生田長江（1882-1936）						
1907.11.20	明治 40	生田弘治	「第六章 文學者たるべき資格と男女两性」, 「第八章 讀書の材料及び方法」	文學入門	新潮社, pp. 59-77, 88-167; エリオットへの言及はpp. 61, 76, 150.	表紙の記載は「生田長江」; 「ジェーン・オオステンやジョージ・エリオットや、婦人にして而も堂々たる小説家である。」(p. 76)
1908.09.25	明治 41	生田長江	「第七章 最近文學の研究」の中の「第二節 英米の文學」	外國文學研究法	新潮社, pp. 201-23; エリオットへの言及はpp. 214, 215.	「エリオットは彼の十八世紀末より十九世紀の初めへかけてのゼン・オオステンと共に、最も注目すべき英吉利の女流作家なのである。」(p. 215)
1925.04.20	大正 14	生田長江	二 英吉利の近代小説	近代外國文學講話	文藝及思想講習叢書, 松陽堂, pp. 8-12; エリオットへの言及はp. 10.	記載は三版(1925.11.20)に基づく
1935.09.20	昭和 10	生田長江	「近代外國文學講話」の中の「二 英吉利の近代小説」	近代文學講話	宮本書房, pp. 8-12; エリオットへの言及はp. 10.	徳田秋聲の『日本文学史』, 生田長江の『近代外國文學講話』(1925.04.20), 吉江孤雁の『自然文學話』を合本したもの
相馬御風（1883-1950）						
1917.11.25	大正 6	相馬御風	「英米文學講話」の中の「四 寫實主義乃至自然主義的傾向」	生田長江, 昇曙夢, 野上白川, 相馬御風, 嶋村抱月, 森田草平 供述『新文學百科精講』	新潮社, pp. 488-91; エリオットへの言及はp. 489; 他に「近代文學年表」のpp. 2, 6, 11においてもエリオットに言及	「閨秀作家として名を馳せたエリオット(一八一九 - 一八八〇)は、心理描寫に於て非凡の手腕を示した。」(p. 489); 記載は再版(1918.05.18)に基づく
1921.10.18	大正 10	生田長江, 野上白川, 昇曙夢, 森田草平共著	「第十一講 英米近代文學」の中の「(四) 寫實主義乃至自然主義的傾向」	近代文藝十二講	新潮社, pp. 395-98; エリオットへの言及はp. 396; 他に巻末の「近代文學年表」のpp. 2, 6においてもエリオットに言及	「第十一講」の内容は『新文學百科精講』(新潮社, 1917.11.25)とはほぼ同一である。それ故、執筆者は相馬御風と考えてよいであろう; 記載は35版(1926.06.30)に基づく
中村星湖（1884-1974）						
1909.12.10	明治 42	中村星湖	「一三 序言, 小説の起源及其發」, 「一四 小説の目的」, 「一五 寫實とロマンス」, 「一六 小説の本質」	早稲田文学社編『文藝百科全書』	隆文館, pp. 22-23, 23-24, 24-26, 26-28; エリオットへの言及はpp. 23, 24, 25.	『アダム・ビード』(p. 25), 『ロモラ』(p. 25)に言及; 日本図書センターより全3巻に分冊して復刻, 『文芸資料事典 [1] 第1巻』(日本図書センター, 2002.03.25)を参照
1921.05.18	大正 10	中村星湖	「歐洲近代小説史講話」の中の「第三章 寫實主義の時代」	相馬昌治, 中村星湖 編『文藝百科要義 中巻』	春陽堂, pp. 56-84; エリオットへの言及はpp. 66-68.	『ロモラ』を第二期としてその後を第一期, 第三期として, エリオットの作品を三期に分けて解説している (p. 67)
野上弥生子（1885-1985）						
1965.04.	昭和 40	野上彌生子	はじめてオースティンを読んだ話	世界の文学 第6巻 オースティン 附録27 (月報)	中央公論社, pp. 1-2; エリオットへの言及は p. 1.	「夏目先生が貸してくださったのはジェーン・オースティンの "Pride and Prejudice" (自重と偏見) にシャロット・ブロンテの "Jane Eyre" (ジェーン・エア), それにジョージ・エリオットのものが一冊, その他はエドモンド・ゴスの著であったかと記憶するが絵入りの英文学史であった。」(p. 1); 『隨筆 一隅の記』(新潮社, 1968.08.30)に収録

1968.08.30	昭和 43	野上弥生子	はじめてオースティンを読んだ話	隨筆 一隅の記	新潮社, pp. 202-04; エリオットへの言及はp. 202.	初出は『世界の文学 第6巻 オースティン 附録27』月報 (1965.04)
1982.01.07	昭和 57	野上彌生子	はじめてオースティンを読んだ話	野上彌生子全集 第二十二巻	岩波書店, pp. 361-63: エリオットへの言及はp. 361.	初出は『世界の文学 第6巻 オースティン 附録27』月報 (1965.04)
賀川豊彦 (1888-1960)						
1929.11.03	昭和 4	ジョージ・エリオット	ロモラ	賀川豊彦	改造社, 世界大衆文學全集第33巻, 512 pp., A6	「必要のないものを、どしどし切り捨て、必要な者だけを殆ど原文通りに翻訳した」(p. 2) もの; 巻頭に「譯者序」(pp. 1-2); カバー(表)にはカラーの挿絵「深窓に育くまれた明眸ロモラ」; カラー口絵1葉「書齋に於けるロモラとその父」; カラー口絵の裏には訳者の肖像写真が載っている; 「譯者序」において、「私が非常に忙しかつたのと、視力が弱いために思つたやうに文章の推敲が出来ず、友人青芳勝久氏に手伝つて頂」いたと述べられている (p. 2)
和辻哲郎 (1889-1960)						
1917.05.01	大正 6	ニイチエ	二〇四 チュウリヒ、十月廿二日、一八八四。	ニイチエ書簡集	和辻哲郎	岩波書店, pp. 407-09; エリオットへの言及はp. 409: 「彼女 [ヘレネ・ドゥルスコウィツ] の最近の著書がどんなにお前の氣に入るか、まあ読んで御覧、(「三人の英國女詩人、」の中には彼女の非常に尊敬するエリオットがある。それからシェレエに関する著書。)」(pp. 408-09)
矢野峰人 (1893-1988)						
1925.08.25	大正 14	矢野禾積 (矢野峰人)	ボッカアチオと英文學	文藝	第十六年第八號及第九號, pp. 75-89.	エリオットの詩 "How wise loved the King" ^[ママ] に言及 (p. 574); 『比較文學 — 考察と資料 一』(南雲堂, 1956.03.25) に、表記及び内容の一部を変更の上、収録
1936.05.01	昭和 11	矢野峰人	「第五編 ヴィクトリア朝より世紀末・大戦前まで (1832-1914)」の中の「第五節 小説界の諸巨星」	世界文藝大辭典 第七巻	中央公論社, pp. 336-37; エリオットへの言及はp. 336.	
1941.07.25	昭和 16	矢野峰人		英文學主潮史 III (十九世紀より)	研究社, pp. 38, 49, 54, 60, 61.	
1954.03.25	昭和 29	矢野禾積		ヴィクトリア朝詩歌論	研究社, 研究社新英米文學語學講座 (12), pp. 183, 219-20.	
1955. 05.22	昭和 30	矢野峰人	坪内逍遙と英文學	明治大正文學研究	第十六號, 東京堂, pp. 10-17; エリオットへの言及はpp. 12, 13.	
1956.03.25	昭和 31	矢野峰人	ボッカアチオと英文學	比較文學 — 考察と資料	南雲堂, pp. 91-105; エリオットへの言及はp. 104.	増補改訂版 (1978.03.31) もほぼ同一内容 (表記に一部変更あり)
1956.07.30	昭和 31	矢野峰人	「第一章 英文学の特性」, 「第三章 英文学の倫理性」	英文学の特性	松柏社, pp. 3-28, 39-56; エリオットへの言及はpp. 5, 43-44, 47.	記載は第5版 (1969.04.25) に基づく; 『矢野峰人選集3』(国書刊行会, 2007.11.15) に収録
1978.03.11	昭和 53	矢野峰人	ボッカアチオと英文學	比較文學 — 考察と資料 (増補改訂)	南雲堂, pp. 98-110; エリオットへの言及はpp. 109-10.	初版 (1956.03.25)
木村毅 (1894-1979)						
1925.01.20	大正 14	木村毅	「第九講 背景の進化とその哲學的意義」の中の「(一七) エリオットの現實的背景」	小説研究十六講	新潮社, pp. 279-80; 他にpp. 49-50, 101, 112, 125, -26, 134, 135-36, 138, 139, 140, 146, 151-52, 157-58, 164-65, 179-80, 202, 206, 210, 218, 218-19, 231-34, 274, 276, 280-81, 300, 310, 311, 344, 400, 458, 470-71) においてもエリオットに言及	『アダム・ビイド』, 『フロックス河畔の水車小屋』, 『サイラス・マアナア』, 『ロモラ』, 『ミッドルマアチ』, 『ダニエル・デロンダ』に言及; 特にpp. 231-34では『フロックス河畔の水車小屋』第5章の比較的長い一節の引用とその分析がなされている; p. 218の「エリオットの描いたテレンス・マルヴァニイ」とは「ティトウ・メレマ」(Tito Melema) の間違いであろう
1925.10.20	大正 14	木村毅		世界文學の輪郭	新潮社, 文藝入門叢書第一編, p. 200.	

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

1933.04.10	昭和8	木村毅	「第九講 背景の進化とその哲學的意義」の中の「(一九) エリオットの現実的背景」	小説研究十二講	新潮社, pp. 199-200; 他にpp. 42, 53, 65, 72, 73, 75, 76, 78, 82, 87, 92, 98, 111-12, 131, 135, 136-37, 146, 151, 157-58, 196, 200-01, 213, 214, 241, 242, 269, 270, 319 においてもエリオットに言及	『小説研究十六講』（1925.01.20）の縮刷改版（「序」, p. 2）；『アダム・ビイド』、『フロックス河畔の水車小屋』、『サイラス・マアナア』、『ロモラ』、『ミッドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』に言及；特に pp. 157-58では『フロックス河畔の水車小屋』第5章の比較的長い一節の引用とその分析がなされている；p. 146の「エリオットの描いたテレンス・マルヴァニ」とは「ティトウ・メレマ」(Tito Melema) の間違いであろう	
1934.05.01	昭和9	木村毅		英文學の社會的背景	英語英文學講座刊行會, 英語英文學講座, p. 63.		
1975.10.20	昭和50	木村毅	第九章 名琴『エミリー』物語	比較文学新視界	松蔭學術研究叢書, 松蔭女子学院大學學術研究会, 松蔭女子学院短期大學學術研究会発行, 八木書店制作発売, pp. 231-48; エリオットへの言及はpp. 236-37.	エリオットの詩「ストラディヴァリウス」の抄訳を引用	
1980.07.31	昭和55	木村毅	「第九講 背景の進化とその哲學的意義」の中の「(一七) エリオットの現実的背景」	小説研究十六講	恒文社, pp. 252-53; 他にpp. 59, 104, 112, 123, 130, 131, 133, 134, 135-36, 139-40, 144, 149, 156, 168-69, 189, 192, 194, 202, 206, 212-14, 248, 250, 252-53, 253-54, 278, 307, 307-08, 353, 400, 410 においてもエリオットに言及	新装版（初版は1925.01.20; なお, 表記が新たな, 新漢字等にあらためられ, 新たに「序」の前に, 松本清張による「葉脈の人 — 木村毅と私」(pp. 1-4) が掲載されている；『アダム・ビード』、『フロックス河畔の水車小屋』、『サイラス・マナー』、『ロモラ』、『ミッドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』に言及, 特にpp. 212-14では『フロックス河畔の水車小屋』第5章の比較的長い一節の引用とその分析がなされている；p. 202の「エリオットの描いたテレンス・マルヴァニ」とは「ティト・メレマ」(Tito Melema Melema) の間違いであろう	
西脇順三郎 (1894-1982)							
1934.07.25	昭和9	西脇順三郎		現代英吉利文學	第一書房, pp. 35, 45, 46, 68, 79.	「George Eliot は我々の先生がすすめたものである。特に <i>The Mill on the Floss</i> 私はしかし讀まなかった。しかし <i>Romola</i> が相当印象深いものであったが, <i>The Cloister and the Hearth</i> を讀んだときに前者は消された。」(p. 68)	
1948.	昭和23	西脇順三郎		近世英文学史	慶応通信教育図書株式会社	未確認(劣化のため複写等謝絶)；西脇順三郎, 「近世英文学史」, 『西脇順三郎全集第九卷』(筑摩書房, 1972.08.30) を見よ	
1972.08.30	昭和47	西脇順三郎	現代英吉利文学	西脇順三郎全集 第九卷	筑摩書房, pp. 83-377; エリオットへの言及は pp. 110, 119, 120, 141, 151, 357.	「George Eliot は我々の先生がすすめたものである。特に <i>The Mill on the Floss</i> 私はしかし讀まなかった。しかし <i>Romola</i> が相当印象深いものであったが, <i>The Cloister and the Hearth</i> を讀んだときに前者は消された。」(p. 141)	
1972.08.30	昭和47	西脇順三郎	近世英文学史	西脇順三郎全集 第九卷	筑摩書房, pp. 534-663; エリオットへの言及は pp. 651, 659.		
1994.09.20	平成6	西脇順三郎	現代英吉利文学	定本 西脇順三郎全集 第十卷	筑摩書房, pp. 83-377; エリオットへの言及は pp. 110, 119, 120, 141, 151, 357.	『西脇順三郎全集 第九卷』(1972.08.30) 所収の「現代英吉利文学」と同一内容；「George Eliot は我々の先生がすすめたものである。特に <i>The Mill on the Floss</i> 私はしかし讀まなかった。しかし <i>Romola</i> が相当印象深いものであったが, <i>The Cloister and the Hearth</i> を讀んだときに前者は消された。」(p. 141)	
1994.09.20	平成6	西脇順三郎	近世英文学史	定本 西脇順三郎全集 第十卷	筑摩書房, pp. 534-663; エリオットへの言及は pp. 651, 659.	『西脇順三郎全集 第九卷』(1972.08.30) 所収の「近世英文学史」と同一内容	
柳田泉 (1894-1969)							
1927.10.10	昭和2	柳田泉	明治の歴史小説研究	日本文學講座 第十一卷	新潮社, pp. 1-30 [各論文ごとに頁付け]; エリオットへの言及はp. 5.	「第二期の歴史小説家といへばリットンの外に, エベールス, イリオット, リイドなどであるが……」(p. 5); 『隨筆 明治文学 2 — 文学篇・人物篇』(東洋文庫, 平凡社, 2005.09.14) に収録	
1966.11.30	昭和41	柳田泉		『小説神髓』研究	春秋社, 明治文学研究第二卷, pp. 40, 45, 46, 117, 132-36, 258, 260.		

1974.07.10	昭和 49	柳田泉		西洋文学の移入（明治文学研究 第七巻）	春秋社， pp. 132, 199, 242, 261, 262.	p. 261とp. 262における戸川秋骨のエリオット論に関する三つの記事事項は重複（『文学界』第三号掲載分が正しく，他は誤記である）；明治24年の「私立明治女学校 課目」として「五年 シェークスピア戯曲，ミルトン 失樂園，ユーゴー 悲史，エリオット，ロモラ，撰詩，批評，作文，修辞学等（右十時間，大抵外婦人）」（p. 242）が挙げられている
2005.09.14	平成 17	柳田泉著，谷川恵一他校訂	歴史小説研究	随筆 明治文学 2 一 文学篇・人物篇	東洋文庫 742，平凡社，pp. 44-84；エリオットへの言及はp. 50.	
2005.11.10	平成 17	柳田泉著，谷川恵一他校訂	山田美妙	随筆 明治文学 3 一 文学篇・人物篇	東洋文庫 744，平凡社，pp. 187-207；エリオットへの言及は pp. 196-97.	『ロモラ』に言及
井伏鱒二（1898-1993）						
1949.02.10	昭和 24		芳村氏の饒舌	別冊文藝春秋	第十號，文藝春秋新社，pp. 37-50.	「あのころエリオットを講読されてゐた増田先生といふ……」（p. 44），ここで言及されている「エリオット」がジョージ・エリオットであるかどうかは不明である。今後の調査を待たねばならない。ジョージ・エリオットの可能性があるものとして，この書誌にかかげることにした。
1949.09.30	昭和 24		試験監督	試験監督	文藝春秋新社， pp. 219-53.	『別冊文藝春秋』（1949.02.20）掲載の「芳村氏の饒舌」を改題したもの；『井伏鱒二全集第十三巻』（筑摩書房，1998.09.25）などに再録；「あのころエリオットを講読されてゐた増田先生といふ……」（p. 238），ここで言及されている「エリオット」がジョージ・エリオットであるかどうかは不明である。今後の調査を待たねばならない。ジョージ・エリオットの可能性があるものとして，この書誌にかかげることにした。
宮本百合子（1899-1951）						
1947.10.01	昭和 22	宮本百合子	十，嵐の前 一九三七-一九四〇（昭和十二年以降）	婦人と文学	實業之日本社， pp. 211-235；エリオットへの言及はp. 231.	ヴァージニア・ウルフの文学論の中で述べられているエリオットのことに言及
1948.04.25	昭和 23	宮本百合子	女性の歴史 一 文学にそって 一	女性の歴史	婦人民主クラブ出版部，pp. 19, 22.	1947年4月，岡山市における「文学講演会」の講演速記（『宮本百合子全集 第十七巻』[新日本出版社，2002.03.30]の「解題」，p. 477）；本文末尾に「一九四七年四月」の記載；「十九世紀のイギリス文学では，その名を忘れることの出来ないジョージ・エリオット。」（p. 19）
1951.05.15	昭和 26	宮本百合子	女性の歴史	若い女性のために	河出書房，市民文庫17，pp. 10-41；エリオットへの言及はpp. 19, 20, 21.	記載は第12版（昭和28年2月10日）に基づく
1964.12.10	昭和 39	宮本百合子	「婦人と文学」の中の「十，嵐の前 一九三七-一九四〇（昭和十二年以降）」	宮本百合子評論選集 3	新日本出版社， pp. 242-56；エリオットへの言及はp. 354.	ヴァージニア・ウルフの文学論の中で述べられているエリオットのことに言及
1979.11.20	昭和 54	宮本百合子	女性の歴史	宮本百合子全集 第十三巻	新日本出版社， pp. 160-86；エリオットへの言及はpp. 168, 170.	
1980.04.20	昭和 55	宮本百合子	「婦人と文学」の中の「十，嵐の前 一九三七-一九四〇（昭和十二年以降）」	宮本百合子全集 第十二巻	新日本出版社， pp. 392-412；エリオットへの言及はpp. 409.	
2002.03.30	平成 14	宮本百合子	女性の歴史 一 文学にそって 一	宮本百合子全集 第十七巻	新日本出版社， pp. 9-32；エリオットへの言及はpp. 16, 17.	
2002.03.30	平成 14	宮本百合子	「婦人と文学」の中の「十，嵐の前 一九三七-一九四〇（昭和十二年以降）」	宮本百合子全集 第十七巻	新日本出版社， pp. 298-316；エリオットへの言及はp. 314	
阿部知二（1903-1973）						
1952.08.15	昭和 27	阿部知二	「小説論」の「二 イギリス小説の展開」の中の「十九世紀の小説」	著者代表 成田成壽『英語・英米文学講座 第4巻 英米文学論』	河出書房， pp. 25-29；エリオットへの言及はp. 29.	
1963.06.30	昭和 38	阿部知二		世界文学の流れ	河出書房新社， pp. 170-71, 171, 212, 307, 317.	『カラー版 世界文学の歴史』（1971.04.20）を見よ

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

1971.04.20	昭和46	阿部知二		カラー版 世界文学の歴史	河出書房新社, pp. 186, 235, 351.	初版『世界文学の流れ』（1963.06.30）の新版（「序文」pp. 2-3）；新装版（1989.12.15）
清水幾太郎（1907-1988）						
1970.02.20	昭和45	清水幾太郎	「コントとスペンサー」の中の「スペンサーのコント観」	世界の名著 36 コント スペンサー	中央公論社, pp. 42-44；エリオットへの言及はp. 42	
中村眞一郎（1918-1997）						
1949.10.01	昭和24	中村眞一郎	現代小説と時間	人間	十月號（第四卷第十號），鎌倉文庫, pp. 13-21；エリオットへの言及はp. 15.	
1950.05.01	昭和25	中村眞一郎	『細雪』をめぐりて	文藝	五月号, 河出書房, pp. 121-29；エリオットへの言及はp. 127.	目次は「『細雪』を廻りて」
1951.02.01	昭和26	中村眞一郎	フロス河畔の水車場 — 描写の質から見た小説の構想力 —	文藝	二月号, 河出書房, pp. 27-29.	
1951.03.30	昭和26	中村眞一郎	II時間	現代文学入門	東京大学出版部, pp. 31-56；エリオットへの言及はpp. 39-40.	初出は『人間』1949年10月号（1949.10.）の「現代小説と時間」；末尾の「附記」は書きあらためられたもの
1951.03.30	昭和26	中村眞一郎	「VI脱出」の中の「ドイツ小説の場合 — 『感情の混乱』と『城』 —	現代文学入門	東京大学出版部, pp. 200-17；エリオットへの言及はpp. 201, 204.	『展望』1947年10月号に「文学的脱出」と題して発表。のち「脱出」と改題し、「ドイツ小説の場合 — 『感情の混乱』と『城』 —」というエッセイを付加して、単行本『現代文学入門』に収録された。（『中村眞一郎評論全集全一卷』〔河出書房新社, 1972.12.20〕の「解題」〔p. 499〕を見よ）
1953.05.25	昭和28	中村眞一郎	フロス河畔の水車場 — 描写の質から見た小説の構想力	文学の魅力	東京大学出版会, pp. 218-25.	「目次」では「『フロス河畔の水車場』（ジョージ・エリオット）」の表記；初出は『文藝』1951年2月号（1951.02.01）
1955.11.	昭和30	中村眞一郎	ジョージ・エリオットと英国の小説	世界文学全集月報（昭和30年11月）	河出書房	現物未確認；『中村眞一郎評論全集全一卷』（河出書房新社, 1972.12.20）の「中村眞一郎評論初出一覧」（p. 513）の記載に基づく
1960.04.05	昭和35	中村眞一郎	谷崎と『細雪』	新選現代日本文学全集37・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村眞一郎集	筑摩書房, pp. 352-59；エリオットへの言及はp. 357.	初出は『文藝』1955年5月号（1955.05.01）の「『細雪』をめぐりて」
1960.04.05	昭和35	中村眞一郎	「三つの西欧小説」の中の「I『フロス河畔の水車場（G.エリオット） — 描写の質から見た小説の構想力 —』」	新選現代日本文学全集37・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村眞一郎集	筑摩書房, pp. 392-94.	初出は『文藝』1951年2月号（1951.02.01）, 原題には作者名(G. エリオット) なし
1962.04.01	昭和37	中村眞一郎	フィクションとは何か？ — 「文学の擁護」（その八） —	文学界	四月号, 文藝春秋新社, pp. 110-15；エリオットへの言及は p. 113.	
1962.07.22	昭和37	中村眞一郎	日本の思想家 この百年（19）：坪内逍遙 近代文学の礎石	朝日ジャーナル	Vol. 4, No. 29, 朝日新聞社, pp. 90-95；エリオットへの言及は pp. 92, 93.	
1962.11.30	昭和37	中村眞一郎	第八回 フィクションとは何か？	文学の擁護	河出書房新社, pp. 102-14；エリオットへの言及はp. 110.	初出は『文学界』四月号（1962.04.01）
1962.11.30	昭和37	中村眞一郎	第一三回 坪内逍遙と小説	文学の擁護	河出書房新社, pp. 171-86；エリオットへの言及はpp. 178, 181.	初出は『朝日ジャーナル』1962年7月22日号；『中村眞一郎評論全集全一卷』（1972.12.20）の「解題」（p. 502）によれば、『文学界』1961年9月号から1962年10月号まで、14回にわたって連載された。第13回の「坪内逍遙と小説」は「坪内逍遙」と題して『朝日ジャーナル』の1962年7月22日号に発表されたものだが、河出書房新社から単行本として刊行（1962.11.30）される際に、雑誌連載時の第12回「『純粹小説論』再読」と、第13回の「フォークナー追悼」との間に嵌入された。
1970.07.20	昭和45	中村眞一郎	ジョージ・エリオットと英国の小説	西欧文学と私	三笠書房, pp. 33-37.	初出は河出書房『世界文学全集月報』（昭和30年11月）
1972.12.20	昭和47	中村眞一郎	現代小説と時間	中村眞一郎評論全集全一卷	河出書房新社, pp. 82-90；エリオットへの言及はp. 84.	初出は『人間』1949年10月号（1949.10.）の「現代小説と時間」；末尾の「附記」は書きあらためられたもの
1972.12.20	昭和47	中村眞一郎	谷崎と『細雪』	中村眞一郎評論全集全一卷	河出書房新社, pp. 100-107；エリオットへの言及はp. 105.	初出は『文藝』1955年5月号（1955.05.01）の「『細雪』をめぐりて」

1972.12.20	昭和47	中村真一郎	「文学の擁護」の中の「第八回 フィクションとは何か？」	中村真一郎評論全集 全一卷	河出書房新社, pp. 389-94; エリオットへの言及はp. 392.	初出は『文学界』四月号 (1962.04.01)
1972.12.20	昭和47	中村真一郎	「文学の擁護」の中の「第一三回 坪内逍遙と小説」	中村真一郎評論全集 全一卷	河出書房新社, pp. 413-19. エリオットへの言及はpp. 416, 417.	初出は『朝日ジャーナル』1962年7月22日号 (「解題」[p. 502]を見よ)
1975.03.20	昭和50	中村真一郎	谷崎と『細雪』	増補決定版 現代日本文学全集 補巻35・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村真一郎集	筑摩書房, pp. 352-59; エリオットへの言及はp. 357; 『新選現代日本文学全集37・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村真一郎集』(1960.04.05) と同一内容	初出は『文藝』1955年5月号 (1955.05.) の『『細雪』をめぐりて』
1975.03.20	昭和50	中村真一郎	「三つの西欧小説」の中の「I『フロス河畔の水車場 (G. エリオット) — 描写の質から見た小説の構想力 —』」	増補決定版 現代日本文学全集 補巻35・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村真一郎集	筑摩書房, pp. 392-94; 『新選現代日本文学全集37・山本健吉, 中村光夫, 吉田健一, 中村真一郎集』(1960.04.05) と同一内容	初出は『文藝』1951年2月号 (1951.02.01), 原題は作者名 (G. エリオット) なし
1980.12.10	昭和55	中村真一郎	翻訳の文学的意味について	文学	12月号 (Vol. 48), 岩波書店, pp. 1-14; エリオットへの言及はpp. 2, 3-4n (5).	
1984.05.16	昭和59	中村真一郎	『フロス河畔の水車場』(G・エリオット) — 描写の質から見た小説の構想力	中村真一郎評論集成 2 私の西欧文学	岩波書店, pp. 69-74.	初出は『文藝』1951年2月号 (1951.02.01), 原題は作者名 (G. エリオット) なし
1984.06.18	昭和59	中村真一郎	「I 二十世紀小説」の中の「2 時間」	中村真一郎評論集成 1 文学の方法	岩波書店, pp. 26-43; エリオットへの言及はp. 31.	初出は『人間』1949年10月号 (1949.10.) の「現代小説と時間」; 末尾の「附記」は書きあらためられたもの
1984.06.18	昭和59	中村真一郎	「I 二十世紀小説」の中の「6 脱出」における「ドイツ小説の場合 — 『感情の混乱』と『城』 —」	中村真一郎評論集成 1 文学の方法	岩波書店, pp. 148-61; エリオットへの言及はpp. 148, 150-51.	初出は『現代文学入門』(東京大学出版部, 1951.03.30)
1984.06.18	昭和59	中村真一郎	翻訳の文学的意味について	中村真一郎評論集成 1 文学の方法	岩波書店, pp. 395-420; エリオットへの言及はp. 396-97, 413n(5).	初出は『文学』1980年12月号 (1980.12.10)
1984.07.16	昭和9	中村真一郎	「文学の擁護」の中の「第八回 フィクションとは何か？」	中村真一郎評論集成 5 芸術をめぐって	岩波書店, pp. 144-54; エリオットへの言及はp. 151.	初出は『文学界』四月号 (1962. 04.01)
1984.07.16	昭和59	中村真一郎	「文学の擁護」の中の「第一三回 坪内逍遙と小説」	中村真一郎評論集成 5 芸術をめぐって	岩波書店, pp. 202-15; エリオットへの言及はpp. 208, 210.	初出は『朝日ジャーナル』1962年7月22日号
1984.09.17	昭和59	中村真一郎	谷崎と『細雪』	中村真一郎評論集成 4 近代の作家たち	岩波書店, pp. 104-20; エリオットへの言及はp. 116.	初出は『文藝』1950年5月号 (1950.05.01) の『『細雪』をめぐりて』
1985.07.25	昭和60	中村真一郎	第九回 伝記あるいは人の一生 — 『澀江抽斎』と『ジョンソン伝』	読書三昧	新潮社, pp. 185-89; エリオットへの言及はp. 185.	
鶴見俊輔 (1922-)						
1983.06.01	昭和58	鶴見俊輔	女流作家とその「夫人」	文藝春秋	昭和58年6月号, 文藝春秋, pp. 278-81.	エリオットへの言及はpp. 280-81.
1985.03.10	昭和60	鶴見俊輔	女流作家とその「夫人」	読書日録	潮出版社, pp. 113-20; エリオットへの言及はpp. 118-20.	初出は『文藝春秋』昭和58年6月号 (1983.06.01)
城山三郎 (1927-)						
1999.11.28	平成11	城山三郎	いつもそばに, 本が(上): 今も響くコールドウエルの声	『朝日新聞』朝刊	朝日新聞東京本社, 「読書」面, p. 11.	「……原書で小説を読めとは途方もなく無理な注文といえるのだが, とにかく読み終えさせられていた。続いて, キッピング。さらにジョージ・エリオット」(p. 11)
1999.12.05		いつもそばに, 本が(中): 「残る者」の思いに心奪われ		朝日新聞東京本社, 「読書」面, p. 11.		
1999.12.12		いつもそばに, 本が(下): 文学と経済の接点見いだす		朝日新聞東京本社, 「読書」面, p. 11.		

日本の作家等とジョージ・エリオット（書誌）〔続〕

長田弘（1939-）						
1987.09.20	昭和 62	長田弘	水車場の少女の「い いえ」	食卓一期一会	晶文社, pp. 173-75; 『フ ロス河の水車場』(工藤 好美・淀川郁子訳)に 示唆をうけて作られた 詩	
1999.02.17	平成 11	長田弘	本は読む人を語る	本という不思議	みすず書房, pp. 235-47; エリオットへの言及はp. 245.	
落合恵子（1945-）						
1990.03.04	平成 2	落合恵子	『新フェミニズム批 評』エレイン・ショー ウォーター編：招か れたもの目指し（書 評）	朝日新聞	朝日新聞東京本社, 「読 書」面, p. 16.	「『見直し』の対象は、文学史上に名を留 めおくことができた極めてまれな少数の女 性作家、ブロンテ姉妹、ジェーン・オー スティン、ジョージ・エリオットにはじま って……」

注

- 1 本書誌の主要参考文献に関しては前号に掲載した「日本の作家等とジョージ・エリオット」の注1を参照。